Documentary

アラブ・日本人租界のドクター事情

岡本 文夫（元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）

日本を離れること 1 万キロ。日本人オイルマンがサウディアラビア王国の原油生産現場で勤務する上で必須となる医療環境を軸としてドキュメントしてみよう。

筆者が現地駐在した通算８年間。約 130 人の日本人が常駐し操業に従事する中、病気で亡くなった同僚が 3 名。交通事故死が 2 名。開発権益更新の応援に来て頂いた通産省 K 部長も、交通事故で殉職された。如何に厳しい現場であったかを物語っています。

更に、湾岸戦争に先立つ湾岸危機と称する半年間は、サウディ政府の厳命により退避が許されず、「死にたくない！しかし逃げられない！」という過度の拘束性ストレスから、６名が発癌。イラク軍の猛砲撃で殺された者は、幸いにしていなかったものの、日本での治療虚しく逝去した日本人従業員が３名いたことも悲しい事実です。

終章　カフジのナイチンゲール

日本人従業員はもちろんのこと、アラブ人たちからもその名医ぶりを尊敬された浅野ドクターも二年間の任務を完遂して、帰国の途についた。国籍を問わずお世話になった患者たちが群がって、出発を盛大に見送った。命の危機であった脳腫瘍の窮地を救ってもらったオスマンも、筆者とともに見送りの列に加わった。

筆者の厳しい評価眼からしても、後藤ドクターと並ぶカフジの名医であった浅野医師だから、その後カフジから帰国した日本人従業員とその家族は、日本でも浅野を主治医と頼って病院を訪れた。

出身元の公立病院では内科医長の席は埋まってしまっていたものの、浅野は杉並区にある有名私立病院慈恵会の院長に迎えられた。世に遍く仁術を施す名医ぶりが評価された妥当な招聘であったといえよう。

両ドクターが信頼と名声を博したのは当然の結果だったが、それに勝るとも

劣らない貢献を示して感謝されたのは看護師の平良米子だった。
カフジでは日本人医師の駐在が断続的であり、しばしば無医村の期間があった。その空白期に日本人患者の不安に優しく対応したのは、結局現地駐在が二十年近くに及んだ平良であった。アラビア語を習得した彼女は、時にアラブ人患者と日本人医師との通訳としてローカルコミュニティの橋渡し役を務めたし、普段から適切な助言で日本人患者を励ました。その結果、カフジ在住の十八か国からなる患者たちからは『平良ドクター』と尊称されるに到った。事実、現地不適応症でノイローゼに陥ってしまった医者などよりも、実務的にもよほど頼りになった。

その自己犠牲を厭わない博愛に満ちた貢献ぶりは、かつて筆者が日射病で死の淵をさまよった時に顕著であった。
頼るべき日本人医師は瀕死の患者を見捨てて帰国してしまったし、付添人もいない深夜の病室で、パレスチナ人の男性看護師が深夜の点滴液の定時交換をしてくれるかどうかは甚だ疑問であった。寝込んでいて交換を忘れた結果、患者が死亡しても言い訳すればそれですむことだ。
「ちゃんと看護していたんですけどねえ。インシャッラー（神の思し召しだ)」
現地では、女性のひとり歩きは昼間ですら厳然たる社会的タブーである。
しかも、石油が国家経済の基幹をなす開発現場だからセキュリティの厳しさには大変なものがある。従って、深夜に女性ひとりが、二十四時間ガードが常駐する数カ所ものゲートを通過するのは全く不可能だ。
しかし、平良はアラブ人女性の黒い民族服を着て、アバヤという黒く顔を覆う布を纏って暗闇に溶け込んだ。まるで忍者のようにセキュリティフェンスの破れ目を探し、これを押し広げて体を通して、病院の敷地へ潜り込んだ。
重大な社会規範破りを犯してまで、平良は病室まで来てくれたのだった。
万が一、不逞の輩に捕まれば、強姦されるかもしれない恐怖もあったにもかかわらず、看護師としての任務を優先したのだった。そして、やっと辿りついた病室で、唸り続ける筆者の看護をしてくれた。
申し訳ないことに、人事不省だった本人は、彼女の命懸けの献身を認識することはできなかった。そんなことにはお構いなしに、翌朝到着した後藤ドクターへ病状説明と引継ぎをして、筆者を死地から救ってくれたのだった。

カフジの住民が遭遇した最悪のドラマが、世界を震撼させた湾岸戦争だった。1990 年８月、突然イラク軍はクウェイトに侵攻して、一日を経ずして蹂躙を終えた。クウェイトとの国境から僅か 18 キロ南に位置するカフジの全住民がパニックに陥ったのは当然だった。直ぐ北の国境にはイラク軍の戦車軍団が展開を終わり、いつでも進軍可能な状態で砲口をカフジに向けていた。

直ちに帯同婦女子約 40 人を強制退避させたのだが、その時駐在していた日本人医師も恐怖にかられて一緒に帰国してしまった。残留者にとっては困ったどころの話ではなかったが、それは誰にも責められることではなかった。
しかし、最後の最後まで残らなければならない日本人従業員を慮って、平良はただひとりの女性として残留する決心をした。どれほど自分が必要とされているかを自覚していたからだ。

日本人従業員が退避できないのには理由があった。
『退避を許さず！』というサウディアラビア政府の厳命があったのだ。
侵攻される恐怖に怯えるサウディを救うのは米軍以外になかった。世紀の暴虐への懲罰としてイラク原油は世界市場からエンバーゴ（出荷禁止）を喰らったし、占拠されたクウェイトからの原油の出荷は途絶した。両国合わせて、世界市場から二割強の原油が消えてしまった結果、驚異的な原油価格の暴騰は必至だった。当時最大の石油消費国のアメリカが絶対に避けたい状況に対処するためには供給欠落を補うしかない。自国を守護してくれるアメリカの要求に絶対逆らえないサウディは、石油生産従事者の命の危険など無視した大増産命令を出したのだ。これに従わない場合、石油開発権益は没収するという威嚇付きの命令だ。カフジの現場以外に事業実態のないアラビア石油はこれに従うしかなかった。
しかし、筆者はもっと深層を読んでいた。厳命を無視して集団退避した場合、軍の強要によって居続けさせられることになる。そうすると自治権すら喪失する最悪の状態に陥ってしまう。自治権さえ手元にあれば、気が狂ってしまった従業員は日本に帰してやれるし、ストレス解消のための休暇を取る権利も残せるからだ。やせ我慢してでも、自主判断による操業を続けるポーズを取らざるをえなかったのだ。
『死にたくない！しかし、逃げられない！』
カフジの従業員は大なり小なり正常な精神状態ではいられなくなった。精神安定剤としての平良の存在はますます大きなものになったといえよう。
『女性の平良さんですら残っていてくださるじゃないか』
この緊急事態に、本社からは給料の倍額条件が提示されたし、万が一死者が出た場合は、１億５千万円の弔慰金を遺族に支払うことが通知された。
『頼むから居てくれ。金は出すから。死んだら補償するから』
これはもはや正常なビジネス環境とはいえず、悲惨な茶番劇の領域だった。

イラク軍のクウェイト侵攻から、国連が組織した多国籍軍が軍事行動を起こすまでに５ケ月半の期間があった。この期間は湾岸危機と称される。なぜそれだけの時間を過ごしたかというと、イラク軍はクウェイト在住の全外国人を人質に取って、重要軍事拠点に張り付かせて人間の盾とする卑劣な作戦に出たから

だ。270 名の在留邦人も、真っ先に攻撃目標にされそうな軍事拠点を始めとして空港や石油開発現場などの重要施設で拘束された。

人質の解放！ 国連は非人道的なイラクの作戦を終わらせるべく外交努力を続けつつ、軍事的には、30 数か国から構成された多国籍軍が包囲網を完成して威圧を掛け続けた。一方、イラクによるクウェイト併合が認められそうな緩和ムードも演出された。勇敢なイギリスの夫人たちは、首都バグダッドに乗り込んで『夫を返せ』デモを行った。

暴君サダム・フセイン大統領は、並行して仕組まれたデタント（緊張緩和）作戦にはまった。未必の故意的に、クウェイト併合が認められるのではないかとの誤解を与えたのだ。その結果、婦女子と子供、50 歳以上の男性、50 歳以下の全男性の順に、時間差をおいて三陣の人質解放が実現した。

人質の安全を確保した途端に、国連は本来の暴虐追求型外交に戻った。急激に高まった緊張に、サダム・フセインは人質カードを切り間違えたとホゾを噛んだが後の祭りだった。国連はイラク軍のクウェイトからの撤退期限を 1991 年 1 月 15 日に定め、これに従わない場合の攻撃開始を通告した。

湾岸危機が勃発した一週間後、従業員の生命安全確保のために、当時副社長だった小長啓一はサウディアラビアに飛び、ナーゼル石油大臣に政府命令を遵守するものの、最後の最後には撤退する許可を求める旨を申し入れていた。

世界最後の実態を有する王国でありイスラーム国家であるサウディ政府と、日本から進出した一民間企業の力関係は非常に片務的なものであった。生命の安全確保という至極当然の権利であっても、情けないことに現地政府に対してこれを主張できるプロパー役員は一人もおらず、責任感溢れる経営者は元通産相事務次官の小長啓一以外にはいなかったのだ。

国家運営の絶対権限は国王自身に直属する内務省が握っており、石油省に退避を許可する立場などなかったにも拘わらず、ナーゼル石油大臣は言葉を選びながらも開戦前日の午後、秘密電話でこれを予告して小長との信義を守った。

『明朝未明、何か重要な連絡をするかも知れない』と。

1 月 16 日夕刻、鉱業所の最高責任者である戸野浩専務は、日本人従業員を日本人食堂に集めた。その時点で、まだ現場に残っていたのは 47 名の男性従業員と唯一の女性である平良だけであった。本来なら 1800 人いるはずのアラブ人従業員は逃散してしまっており、100 名も残っていなかった。

平良の命懸けの残留に、改めて戸野が代表して感謝を表明し、居合わせた全員が盛大な拍手をした。謙虚な平良は恥ずかしそうにコクリと頷いた。

1 月 17 日未明、多国籍軍がバグダッド攻撃を開始した急報が伝えられた。直ちにイラク軍もこれに反撃するとともに、カフジ基地への砲撃を開始した。

漠たる予告を受けていたとはいうものの、死の恐怖に直面した衝撃は計り知れないものがあった。
　筆者のシッピングのラインには、柔道の弟子でもあるふたりのサウディ人部下二人が最後までつき従っていた。直ちに両名に退避命令を出した筆者は、防空壕と称する地中に埋めた大口径パイプラインに向けて走りだした。その時、すでに砲撃は始まっていた。走る方向に着弾の大きな砂柱が立って、さすがに筆者の足を竦ませた。しかし、取るべき行動は、勇を鼓舞して防空壕へ走ることしかなかった。瞬間、筆者の脳裏にはふたつの相矛盾する思いがよぎった。ひとつは、死の恐怖だ。
『殺されるっ！』
もうひとつは、轟然たる着弾の炸裂音は解放への祝砲に聞こえた。サウディ政府の強要によって、逃げたくても逃げられない呪うべき拘束の半年間だった。
いくら何でも、これ以上留まれと命じられるはずがない。厳命に反した場合、日本人を拘束するべきサウディ陸軍ですら攻撃から逃げるからだ。
　イラク軍の砲撃は一方的に六時間続いて、カフジ基地への着弾は五百発を下回ることはなかっただろう。砲声が止んだのは、米軍のファントム戦闘機三機が超低空で筆者たちの頭上をかすめ飛び去って、国境に布陣するイラク軍を急襲し、空対地ミサイルで反撃したからだ。
『逃げるなら今しかない！』
三か所の防空壕に潜っていた従業員は退避行動に移ろうとした。
筆者も纏めてあった退避荷物を取りに自室に戻った。死の恐怖が薄まると、寒さが身に染みた。サウディアラビアといえども、１月中旬未明はかなり寒い。
しかも、その朝は曇天で風が強かった。仕事の立場上、沖合に停泊するタンカーから冬場も呼び出しを受ける筆者は、サウディへの赴任に当たって粉末カイロを持参する珍しい日本人だった。引き出しを探すと使い残りのカイロが三袋見つかった。
筆者は必死になって、唯一の残留女性を探した。予め時間的余裕をもって退避した三十人程のグループは，一番大型の防空壕に集まっており、平良は持ち込んだ毛布にくるまって寒さと恐怖に耐えていた。
「ああ、いたいた、平良さん。ほら、カイロだよ。使って下さい」
「あらあ。私、嬉しいわあ」
素直に最大の謝意を表してくれた平良は、筆者を心から喜ばせた。
『平良さん。あの時の看護への、ほんの恩返しだよ』

　湾岸戦争に巻き込まれた日本人は、平和な日本へ戻った後も、毎年開戦日には集まって、筆舌に尽くせない苦労を偲ぶ会合を持つことにしている。会の名称は、

開戦日そのものから命名した『１．１７会』という。
遠慮がちな平良は皆勤の常連メンバーではないが、強く出席を求められるとこれに応じてくれる。平時であるか戦時であるかを問わずお世話になった従業員は、等しく平良の献身への深い感謝を述べるのだが、本人が恥ずかしそうに返す言葉はひとことだけだ。
「本当に、いろいろありましたよねえ」
そのあとは、多かれ少なかれ様々な看護したメンバーの健在ぶりを、微笑みながら満足そうに静かに見守るだけである。
　カフジのナイチンゲールは、往時と同様にあくまでも謙虚さを崩すことはない。



おかもと・ふみお

1947年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田吉隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」（財界研究所刊）を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段（クウェート国柔道連盟七段）。

完